

第 31 回日本農業研究所賞の受賞者 3 件の決定について（公表資料）

令和 6 年 3 月 28 日

公益財団法人日本農業研究所の第 31 回日本農業研究所賞の受賞者 3 件は、下記のとおり決定しましたので、選考委員による業績紹介資料を添付のうえ公表します。

なお、表彰式を開催し、賞状及び賞金 100 万円を授与します。

日本農業研究所賞受賞候補者選考委員会委員長 三輪 睿太郎

公益財団法人 日本農業研究所理事長 田家 邦明

記

受賞者 研究業績の題名
(五十音順)

こ が ひろ のり
古 賀 博 則：電子顕微鏡観察等によるイネいもち病の感染防御機構の解明およびエンド
ファイトの害虫防除への利用

どう ち おきむ
堂 地 修：牛の凍結受精卵の移植技術の簡易化に関する研究と普及

なか むら とし き
中 村 俊 樹：モチ小麦等新形質小麦の開発と社会実装

こ が ひろ のり
古 賀 博 則 (年齢 72 歳) (昭和 26 年 10 月 3 日生)

(略歴) 昭和 51 年 3 月 京都大学農学部農林生物学科卒業
昭和 53 年 3 月 京都大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和 54 年 3 月 京都大学大学院農学研究科博士課程中途退学
昭和 54 年 4 月 農林省北陸農業試験場環境部病害第 2 研究室 研究官
昭和 60 年 1 月 学位取得(京都大学、農学博士)
昭和 61 年 7 月 科学技術庁長期在外研究員として米国ミネソタ大学に留学(1年間)
平成 2 年 4 月 農林水産省草地試験場環境部作物病害研究室 研究官
平成 4 年 9 月 OECD 共同研究プロジェクトでニュージーランドに出張(5ヶ月間)
平成 7 年 4 月 農林水産省東北農業試験場水田利用部水田病害研究室長
平成 8 年 4 月 石川県農業短期大学 附属農業資源研究所教授
平成 17 年 4 月 石川県立大学生物資源環境学部教授
平成 29 年 4 月 石川県立大学名誉教授、同大学客員教授

研究業績の題名

電子顕微鏡観察等によるイネいもち病の感染防御機構の解明およびエンドファイトの害虫防除への利用

業績紹介

古賀博則氏は、卓越した電子顕微鏡観察技術によって、イネいもち病菌のイネ表皮細胞侵入の瞬間から細胞中での侵入菌糸の伸展や蔓延の感染過程や、イネ細胞の抵抗反応の微細構造を詳細に可視化した。

特に、被害に直結する稲穂の組織は極めて硬く、顕微鏡観察が困難であった。そこで、硬組織から透過型電子顕微鏡用の良好な超薄切片を得るため、高い浸透力を有する低粘性樹脂をじっくり組織になじませる独自の固定・包埋法を考案し、初めて感染過程をリアルに示した。また、新タイプの全身抵抗性獲得型の殺菌剤の作用過程を走査型電子顕微鏡で観察し、本剤を根から吸収させたとき離れた部位の葉鞘でもいもち病菌の侵入を受けたイネ細胞が褐変・壊死反応を起こし、菌糸進展の停止という本剤の作用機構を鮮明にした。

この時に考案した根をつけたままの葉身を用い、その葉鞘の内側にいもち病菌を接種する方法は、実験室内で全身抵抗性を細胞学的に検出する手段として優れ、イネいもち病圃場抵抗性遺伝子 *p i21* の単離同定に大きな役割を果たした。イネいもち病の圃場抵抗性の導入が急がれていた際に、本法はその検定手段として活用され、圃場抵抗性で良食味の「ともほなみ」育成に貢献した。

その後、イネ科牧草のエンドファイト(植物内生菌)の生活史の解明とその有用な機能の活用という先駆的研究に取り組んだ。

植物体内でのエンドファイトの状況を、四酸化オスミウムで細胞膜系だけを固定した試料の凍結割断面を作成し、走査電子顕微鏡で観察し、エンドファイトの菌糸は植物細胞内に侵入することなく、細胞と細胞の間隙を進展するという共生成立機構を明らかにした。また、植物細胞の生長に引きずられ菌糸の節間が伸長する発見は、菌糸は先端でのみ生長するという菌学の常識を覆す新知見となった。

さらに、エンドファイトの培養菌糸を抗原とする免疫電顕法の開発によって、植物体内のエンドファイトが抗原のそれと同じ種か否かの判定を可能にした。エンドファイトに感染した一部の芝草では重

害虫であるシバツトガに耐虫性を示すという機能に着目し、培地上で培養したエンドファイトの菌糸をこれら芝草の幼苗の分裂組織に付傷接種する方法を開発し、シバツトガ耐虫性芝草の作出に成功した。感染したエンドファイトは結実種子から次の世代の成植物にも移行し、耐虫性は持続するため、一般社団法人草地畜産種子協会に技術移転され、今日、多くのゴルフ場ではシバツトガの防除にエンドファイト感染芝草種子が用いられ、農薬削減に大きく貢献している。

(小川 奎選考委員記)

過去に受けた主な賞

- 昭和 60 年 日本植物病理学会学術奨励賞
- 平成 16 年 医学生物学電子顕微鏡技術学会功労賞
- 平成 17 年 医学生物学電子顕微鏡技術学会賞

どう ち
堂 地

おさむ
修

(年齢 63 歳) (昭和 35 年 6 月 26 日生)

- (略歴) 昭和 58 年 3 月 酪農学園大学酪農学部卒業
昭和 58 年 4 月 農林水産省入省 日高種畜牧場 種畜課 配属
昭和 63 年 4 月 農林水産省日高種畜牧場 家畜人工妊娠課 繁殖係長
平成 2 年 10 月 農林水産省家畜改良センター日高牧場種畜課 人工授精係長
平成 3 年 1 月 農林水産省家畜改良センター技術部技術第一課 企画調整係長
平成 8 年 4 月 農林水産省中国農業試験場畜産部 育種繁殖研究室 研究員
平成 10 年 7 月 農林水産省家畜改良センター新冠牧場種畜第一課 調査係長
平成 10 年 9 月 農林水産省退職
平成 10 年 3 月 学位取得 (北海道大学、博士 獣医学)
平成 10 年 10 月 酪農学園大学酪農学部酪農学科家畜繁殖学研究室 助教授採用
平成 17 年 4 月 酪農学園大学酪農学部酪農学科家畜繁殖学研究室 教授
平成 18 年 3 月 カナダ、サスカチワン大学獣医学部滞在研究員 (～平成 19 年 3 月)
平成 23 年 4 月 酪農学園大学農食環境学群循環農学類家畜繁殖学研究室 教授 (現在に至る)
令和 3 年 1 月 酪農学園大学学長 (～令和 5 年 4 月)

研究業績の題名

牛の凍結受精卵の移植技術の簡易化に関する研究と普及

業績紹介

堂地修氏は、牛凍結受精卵を農家の庭先で融解してそのまま移植できる技術を世界に先駆け開発するとともに、その普及に尽力した。

家畜の遺伝的能力の改良と優良家畜の増殖は畜産の基本であるが、雌牛が生涯に生産可能な子牛の頭数は限られる。優良な遺伝的能力を有する雌の卵子から受精卵 (胚) を生産し胚移植により多数の子牛が得られれば、牛の改良・増殖を促進できる。そのためには、いつでも、どこでも利用可能な凍結胚が不可欠である。

凍結胚から子牛が世界で初めて生産されたのは 1973 年である。当初は凍害防止剤として凍結精液でも利用されているグリセリンが多く供試され、研究的には成功を収めた。しかし、この手法では胚の浸透圧障害を防ぐため凍結時や融解時にグリセリン濃度を段階的に変える (ステップワイズ法) ことから、移植に先立ち胚を実験室内で保存容器 (ストロー) から取り出して顕微鏡下での融解処理を行うことなどが不可欠で、実施者も施設も限定されていた。

技術を簡易化し普及を図るために、ストロー内で希釈操作を行うワンステップストロー法や希釈を必要としないダイレクト法の開発が世界中で進められた。堂地氏らは日高種畜牧場においてショ糖を利用してストロー内でグリセリンを希釈するワンステップストロー法による新たな手法を開発し、ステップワイズ法に劣らない受胎率を得た。しかし、ストロー内の受精卵の操作に熟練が必要であり、実施者によって受胎率がばらついたことから広く普及するまでには至らなかった。

そこで堂地氏は、我が国の研究者によるエチレングリコール (EG) が凍害防止剤として有効であるとの実験動物での報告やマウス凍結胚では EG を希釈しなくても生存性が高いとの先行研究に着目し、牛凍結胚の凍害防止剤として EG を利用する新たなダイレクト法を世界に先駆けて開発した。さらに堂地氏は、11 道府県の公設場所が参加する大規模な野外試験を主導してその有効性を示した。この技術

は、特別の施設や機械器具等を準備する必要なく凍結胚を民間の獣医師や人工授精師が農家の庭先で融解してそのまま移植できることから急速に普及し、現在ではほとんどの凍結胚で利用されている。

堂地氏は大学に転じてからも胚移植に関する研究室を主宰し学生に対する教育を通じて技術を教授するとともに、生産者への直接的な啓蒙・普及活動も積極的に行ってきた。現在では、乳用牛への胚移植による和牛（黒毛和種牛）生産が肉牛経営だけではなく酪農経営における所得形成にも有用な技術として定着しつつある。国の施策として農林水産物の輸出が推進される中で和牛肉は主要品目の一つであるが、同氏が開発した技術が政策実現の基礎となっている。このように、堂地氏の我が国畜産業に対する貢献は非常に大きなものである。

（松本光人選考委員記）

過去に受けた主な賞

平成 15 年 中央畜産会畜産大賞（家畜改良センター胚移植研究グループ、代表者）

平成 30 年 日本繁殖生物学会技術賞

なか むら とし き
中 村 俊 樹 (年齢 65 歳) (昭和 33 年 4 月 5 日生)

(略歴) 昭和 57 年 3 月 筑波大学第二学群農林学類卒業
昭和 59 年 3 月 筑波大学大学院農学研究科修士課程修了
平成 5 年 7 月 学位取得 (筑波大学、農学博士)
昭和 59 年 4 月 農林水産省入省農業研究センター研究員
昭和 59 年 10 月 農林水産省東北農業研究センター研究員
平成 5 年 4 月 農林水産省東北農業研究センター主任研究員
平成 5 年 10 月 カナダゲルフ大学農学部客員研究員 (～平成 6 年 9 月)
平成 6 年 10 月 カナダ植物バイオテクノロジー研究所博士研究員(ポストドク～平成 7 年 9 月)
平成 7 年 10 月 農林水産省東北農業研究センター主任研究員
平成 18 年 4 月 農研機構東北農業研究センターめん用小麦研究サブチーム長
平成 23 年 4 月 農研機構東北農業研究センター畑作園芸研究領域中課題副責任者
平成 29 年 4 月 農研機構・東北農業研究センター畑作園芸研究領域主席研究員

研究業績の題名

モチ小麦等新形質小麦の開発と社会実装

業績紹介

米、大麦、トウモロコシなどの穀物にはモチとウルチが存在し、状況に応じてそれを使い分けることで、豊かな食文化が形作られてきた。ところが、小麦には 1995 年に中村俊樹氏がモチ小麦を開発するまで、世界にモチは存在しなかった。

モチはデンプンを構成するアミロースとアミロペクチンのうち、アミロースを合成する遺伝子機能の欠失で生ずるが、小麦にそれが存在しなかったのは、小麦が種・属の異なる三つの植物が交雑して生まれたもので、それぞれの祖先から受け継いだ三つのゲノムをもつ異質 6 倍体植物であることと関係している。稲、大麦などの 2 倍体植物では一つのアミロース合成遺伝子の突然変異による機能喪失でモチ品種ができるが、小麦でモチ品種が生まれるには三つのゲノムのアミロース合成遺伝子が三つとも機能喪失する必要がある。このことが突然変異で生ずる確率は極めて低く、そのためモチ小麦は存在しなかった。

中村氏は三つのゲノムの内、一つあるいは二つでアミロース合成遺伝子が働かない小麦は存在するのではないかと考えて、そういう部分変異系統の探索に着手した。当時はまだ小麦ゲノム情報が乏しかった時代で、タンパク質の 2 次元の電気泳法に独自の改良を加えることで部分変異系統の分離に成功した。この方法を使って多数の小麦遺伝資源の中からそれぞれのゲノムのアミロース合成遺伝子の部分変異系統を選抜し、次にそれらを交配することで、三つのゲノムすべてでアミロース合成機能が働かないモチ小麦を開発し、小麦が生まれて約 8000 年の歴史で画期的な成果を収めた。

中村氏はさらに、アミロース合成遺伝子の部分変異系統の中には低アミロース小麦が存在することを見出し、分子マーカーを利用したその選抜方法を開発し、低アミロース小麦品種を育成した。同氏はさらにアミロペクチンの合成遺伝子機能が働かない部分変異系統を選抜し、それとアミロース合成遺伝子の変異系統を交配することで、デンプンを合成しないで糖を蓄積する甘味小麦をはじめ、パンの柔らかさや麺の腰の強さなど、製品の物性を大きく左右する多くの新形質小麦を開発した。

中村氏のこれら一連の研究で生まれたモチ小麦等新形質小麦は多くの製パン、製麺、製菓企業等を

通じて社会実装され、消費者に新規の食材・食品を提供するとともに、国産小麦の需要拡大を通じた農業の活性化への貢献が期待される。また、これら新形質小麦の開発で確立された倍数体作物の分子育種法は、小麦に限らずジャガイモなど他の倍数体作物育種の重要な基盤となり得る。

(堀江 武選考委員記)

過去に受けた主な賞

- 平成 8 年 日本育種学会奨励賞
- 平成 12 年 科学技術庁長官賞（研究功績者）
- 平成 21 年 木原記念財団学術賞（特別賞）
- 平成 23 年 日本育種学会賞
- 平成 29 年 日本農学賞・読売農学会賞
- 令和 4 年 安藤百福賞（優秀賞）

説明資料1 日本農業研究所賞とは

この賞は、(公財)日本農業研究所が定款の定めるところに従い、「農業に関する学術研究上の顕著な貢献をした者」を表彰し、その研究業績が今後の農業の発展にも貢献することを期待するものである。昭和40年度が第1回目で、概ね隔年度毎に実施され、今回は第31回目に当たる(参考資料1-過去の受賞者一覧)。毎回の受賞者は、推薦による受賞候補者の中から選考決定され(3件以内)、この方には各100万円の賞金が授与される。

農業に関する学術研究は、その専門分野が多岐にわたり研究組織も多数に上ることから、本表彰事業の趣旨を幅広く適正に実現するため、受賞候補者の推薦及び選考過程につき次のような工夫を行っている。①受賞候補者の推薦について、官・民、中央・地方の農業に関する学術研究を行う大学、試験研究組織にお願いするほか、いわば研究成果の利用評価の可能な農業団体、マスコミ、行政にも広くお願いし、合計430余りの組織等に推薦を依頼している。また、推薦期間も約半年間の長期に設定している。②受賞者選考について、農業に関する学術研究の主な分野を代表する選考委員を13名委嘱し(参考資料2-委員会委員名簿)、推薦者からの業績紹介のヒアリングの機会を設け、最終的には過半数以上の選考委員が投票した者を選考する(3件以内)ことにより、特定分野に偏らないようにしている。

説明資料2 第31回日本農業研究所賞の推薦、選考、決定経過

(1) 受賞候補者の公募

令和5年7月中旬に次のような組織、団体等に11月30日を締切期限として受賞候補者の推薦を依頼した(合計433件)。

農業等関係学会(52)、国公立大学農業等関係学部(99)、農林水産省(4)、政府関係研究機関・特殊法人(6)、国立研究開発法人等(28)、都道府県試験場(121)、民間研究機関(9)、新聞社及び雑誌社(15)、農業関係組織(34)、本賞の過去の受賞者及び選考委員(38)、日本農研役員(27)

(2) 受賞候補者選考委員会の設置と4次にわたる選考

令和5年6月1日の理事会の承認を得て選考委員を委嘱し、7月6日開催の第1回選考委員会で、委員長の互選、運営方法・進め方について協議を行い、「受賞候補者選考の進め方」を決定した。

上記(1)の締切期限までに、9件(実質6件)の受賞候補者の推薦があり、これらの者について、令和6年2月1日開催の第2回選考委員会で1件ずつ推薦者等から業績紹介を受けた。

2月19日開催の第3回選考委員会で、受賞候補者の業績について意見交換を行ったうえで、選考委員に3件以内連記の投票を依頼し、3月8日開催の第4回選考委員会において開票後、過半数以上の投票を得た3件の最終受賞候補者が決定された。

(3) 受賞者の決定

3月15日の理事会において、選考委員会の「日本農業研究所賞受賞候補者選考の経過報告」に基づき受賞者3件を決定した。

なお、5月10日(金)11時より、表彰式をホテル・ルポール麴町において行う予定である。

日本農業研究所賞受賞者一覧（第1回～31回）

第1回（昭和40年度）

大槻正男：農家の経済構造ならびに経済活動に関する研究

第2回（昭和41年度）

石塚喜明

（共同研究）：作物、特に水稲の栄養生理に関する研究

田中明

第3回（昭和42年度）

西川義正：家畜の繁殖ならびに人工授精に関する研究

第4回（昭和43年度）

田島弥太郎：蚕の放射線遺伝学的研究とその応用

第5回（昭和46年度）

上坂章次：和牛の生産能力に関する基礎的ならびに応用的研究

定盛昌助：リンゴの優良品種ふじの育成に関する研究

松島省三：水稲収量の成立理論とその応用に関する研究

第6回（昭和48年度）

有馬啓：Mucor Rennin の発見と研究

笠原安夫：耕地雑草およびその防除に関する研究

高橋治助：アジアにおける水稲の栄養生理的解析による多収技術の確立

第7回（昭和50年度）

嵐嘉一：水稲栽培技術体系の暖地的展開とその史的考証

近藤康男：日本農業の経済学的研究

細田達雄：家畜の血液型とその応用に関する研究

第8回（昭和52年度）

大森常良：牛の急性ウイルス病の防圧に関する研究

加用信文：わが国における農業経済統計の確立

福井重郎：ダイズの生理・生態学的並びに育種学的研究

第9回（昭和54年度）

川田信一郎：わが国における作物栽培の実態解明に関する研究

丹羽太左衛門：豚の繁殖と改良技術に関する研究

福田紀文

：蚕の人工飼料の開発と実用化に関する研究

伊藤智夫

第10回（昭和56年度）

- 石 沢 修 一：本邦農地土壌の微生物学的研究
弥 富 喜 三：害虫の生物学的及び化学的防除に関する研究
野 村 吉 利：ニューカッスル病に対する新免疫方法（L-K法）の開発

第11回（昭和58年度）

- 石 墨 慶一郎：水稻の良質多収品種の育成
西 野 操：柑橘害虫ヤノネカイガラムシの発生予察ならびに生物的防除の研究
山 田 芳 雄：放射化分析およびアイソトープトレーサ法の植物栄養・土壌肥料研究への応用

第12回（昭和60年度）

- 江 崎 春 雄：穀類収穫機の開発に関する研究
西 貞 夫：組織培養の利用による野菜・花き育種技術の開発
古 島 敏 雄：日本農業史の研究

第13回（昭和62年度）

- 坂 井 健 吉：高でんぷん超多収甘藷品種の選抜法の開発および新品種の育成
杉 江 侑 一：家畜の胚（受精卵）移植に関する技術開発研究
中 川 昭一郎：水田の用排水と圃場整備に関する研究

第14回（平成元年度）

- 大 島 信 行：弱毒ウイルス利用による植物ウイルス病の防除
梶 井 功 一：戦後日本の農業経済・農業経営の発展・変化にかんする研究
小 林 勝 利：蚕の内分泌学的研究とその応用

第15回（平成3年度）

- 阿 部 猛 夫：豚の系統造成法に関する研究とその実際的応用
玉 木 佳 男：性フェロモンによる害虫防除に関する研究
増 田 澄 夫：二条大麦（ビール麦）及び六条大麦優良品種の育成

第16回（平成5年度）

- 飯 沼 二 郎：農業近代化の理論的・実証的研究
稲 葉 右 二：各種牛ウイルス病の防除技術の開発及び実用化に関する研究
本 多 藤 雄：促成栽培用イチゴの栽培技術の開発と“はるのか”“とよのか”等優良品種の育成

第17回（平成7年度）

- 岡 田 吉 美：わが国の植物DNA研究における先駆的研究ならびに指導的活動
西 山 壽 一：暖地における水稻優良品種の育成
早 瀬 達 郎
栗 原 淳 一：環境にやさしい肥効調節型肥料の開発および施肥技術の確立

第18回（平成9年度）

- 入谷 明：家畜の繁殖ならびに体外受精に関する研究
江塚 昭典：イネの主要病害に対する品種抵抗性の先駆的研究とその利用技術の開発
川嶋 良一：農業技術研究の推進方策に関する論考

第19回（平成11年度）

- 石橋 晃：家禽のアミノ酸要求量に関する研究
内嶋 善兵衛：農業生産における気候資源の利用技術の開発
貝沼 圭二：澱粉の高度利用化技術の開発に関する研究

第20回（平成13年度）

- 尾関 幸男
：チホクコムギなど良質多収秋まき小麦品種の育成
佐々木 宏
駒田 且：フザリウム菌選択培地の創製とその応用によるフザリウム病の生態ならびに防除に関する研究
清水 悠紀臣：豚ウイルス病の防除法、特に生ワクチン開発に関わる基盤技術の確立

第21回（平成15年度）

- 市川 友彦
：大型汎用コンバイン並びに超小型自脱コンバインの開発
杉山 隆夫
岸本 良一：ウンカ類の海外長距離飛来の実証と防除技術の確立
真鍋 勝：食品のマイトキシン汚染の解明と防除

第22回（平成17年度）

- 春見 隆文：微生物・酵素を利用した新規糖質甘味料の製造技術
西浦 昌男：カンキツ類の珠心胚利用及び交雑による新品種の育成
花田 章：未成熟卵子を利用した反すう家畜の体外受精技術の開発

第23回（平成19年度）

- 祖田 修：農学原論の確立
三輪 睿太郎：食料供給に伴う窒素の動態と環境影響のシステム解析
森 肇：カイコ多角体病ウイルスの構造解析と機能利用に関する研究

第24回（平成21年度）

- 佐伯 尚美：米流通・米政策学と農協論の確立及び戦後日本農業政策に関する研究
土屋 七郎
：リンゴわい性台木の先駆的研究と JM 台木シリーズの育成
羽生田 忠敬
古谷 修：豚における栄養価評価法の開発とその応用

第25回（平成23年度）

- 阿部 亮：家畜飼料の栄養価評価法の確立と低・未利用資源の開発利用に関する研究
西尾 敏彦：新しい視点に立った我が国の農業技術史に関する研究
守山 弘：農村の二次的自然による生物多様性保全機能の解明と成果の普及

第26回（平成25年度）

- 荏開津 典生：転換期の農業・食料問題及び政策形成に関する研究
岡田 齊夫：天敵微生物を用いた生態系調和型害虫防除法の研究
角田 幸雄：胚の顕微操作による新しい家畜改良技術の構築

第27回（平成27年度）

- 太田原 高昭：北海道農業の振興に果たす農協の役割に関する研究
堀江 武：水稻の生育予測モデルの開発とアジア稲作の地球温暖化影響に関する研究
陽 捷行：農耕地から発生する温室効果微量ガスの評価と削減技術の開発・普及

第28回（平成29年度）

- 岩崎 和巳：農業用水路系の水理設計法に関する研究
岩元 睦夫：食品の流通技術の改善・開発及び体系化に関する流通工学的研究
中村 保典：イネ澱粉生合成過程の解明及び成果の農業への活用

第29回（令和元年度）

- 板橋 久雄：ウシの第一胃内微生物消化特性の解明とその酪農技術への応用
大坪 研一：米の品種判別および加工利用技術の開発
田村 俊樹
：遺伝子組換えカイコの作出とその産業利用の技術的基盤の確立
瀬筒 秀樹

第30回（令和3年度）

- 寺田 文典：乳牛および肉用牛の精密栄養管理技術の開発に関する研究

第31回（令和5年度）

- 古賀 博則：電子顕微鏡観察等によるイネいもち病の感染防御機構の解明およびエンドファイトの害虫防除への利用
堂地 修：牛の凍結受精卵の移植技術の簡易化に関する研究と普及
中村 俊樹：モチ小麦等新形質小麦の開発と社会実装

（受賞者氏名は五十音順）

第31回(令和5年度)日本農業研究所賞受賞候補者選考委員会委員名簿
(五十音順、敬称略)

- 大 杉 立 (八ヶ岳中央農業実践大学校校長、東京農業大学客員教授)
- 小 川 奎 (元(公財)日本植物調節剤研究協会理事長)
- 小 澤 健 二 (新潟大学名誉教授、元(公財)日本農業研究所研究員)
- 春 見 隆 文 ((一財)日本醤油技術センター理事長)
- 古 在 豊 樹 (千葉大学名誉教授)
- 佐々木 義 之 (京都大学名誉教授)
- 佐 藤 洋 平 (東京大学名誉教授)
- 生源寺 眞 一 ((公財)日本農業研究所研究員)
- 染 英 昭 (穀物乾燥貯蔵施設協会理事長)
- 西 澤 直 子 (石川県立大学学長)
- 堀 江 武 (元農業・食品産業技術総合研究機構理事長)
- 松 本 光 人 (元農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所所長)
- 三 輪 睿太郎 (元日本農学会会長)

以上 計13名

注：肩書は委員就任時のものとしています。